

インド・ヨーロッパ古文献 に関する覚え書き

吉田 和彦

はじめに

- 1．ホメーロスのテキストから
 - 1．1．韻律からの逸脱 『イーリアス』第9書 415行
 - 1．2．比較言語学から見えること
- 2．リグ・ヴェーダのテキストから
 - 2．1．ゲルマン語派・バルト語派の語末音節縮約
 - 2．2．喉音はいつ消失したのか
- 3．古リトニア語のテキストから
 - 3．1．対応の幻想
 - 3．2．未来形の2つのタイプ
- 4．古期アイルランド語のテキストから
 - 4．1．「川」を意味する名詞
 - 4．2．貴重な対応の例
 - 4．3．子音のダブリング
- 5．トカラ語 A のテキストから
 - 5．1．印欧語族のなかでのトカラ語の位置
 - 5．2．音変化と類推の関係
 - 5．3．トカラ語とヒッタイト語にみられる保守的特徴
- 6．リュキア語のテキストから
 - 6．1．語頭の喉音
 - 6．2．祖語の性格
- 7．おわりに

はじめに

比較言語学の研究に従事するものにとってもっとも重要なことは、一次資料であるテキストを読むことであるのは言うまでもない。そしてテキストを読みながら問題を発見し、その問題を比較文法の可能な限り広

いコンテキストのなかに置いて考える。すなわち、個々の言語がどのような先史を経て成立し、同族のほかの諸言語とどのような歴史的関係にあるかを明らかにすることを旨とする。このような比較言語学的視点に立てば、ひとつの言語内部からだけではまったく説明不可能としか思えない問題がよりよく理解できるようになることがある。

本稿では、いくつかのインド・ヨーロッパ古文献を読みながら気づいた興味深い形式を分析し、それらが印欧語比較言語学に対してもつ意義を具体的に示したい。対象としたテキストは、順にホメーロス、リグ・ヴェーダ、古リトアニア語、古期アイルランド語、トカラ語 A、リュキア語である。

1. ホメーロスのテキストから

1. 1. 韻律からの逸脱 『イーリアス』第 9 書 415 行

表 1 に示したのは、イーリアスの第 9 書の 410 行から 416 行で（便宜的にギリシア文字はローマ字に転写されている）、アキレウスが 2 つの運命のどちらを選ぶべきかを語る場面である。

（表 1）

410	mētēr gár té mé phēsi theà Thétis argurópeza
	— — — U U — U U — U U — U — U
	dikhthadías kēras pherémen thanátoio télōsde:
	— U U — — — U U — U U — U U — U
	ei mén k'aūthi ménōn Tróōn pólin amphimakhōmai,
	— — — U U — — — U U — U U — —
	óleto mén moi nóstos, atàr kléos áphthiton estai:
	— U U — — — U U — U U — U U — —
	ei dé ken oikad'hikōmi philēn es patrída gaīan,
	— U U — U U — U U — — — U U — U
415	óletó moi kléos esthlón, epì dēròn dé moi aiòn
	— U U — U U — U U U — — U U — —

éssetai, oudé ké m'ōka télos thanátoio kikheíē

— U U |— U U |— U U |— U U |— U U |— —

すなわち 母なる女神、白銀しろがねの足のテティスが 言いたもうには、
二筋に別れた運命さだめが 最後きわの際へ我身を 運んでゆこうか。
もしこのまま踏み止まって、トロイエー人の都を的に 戦おうなら、
帰郷どきの秋は失せる代り、不滅ほまの誉れを贏ちえるであろう、
もしまた故郷くにへ戻って、なつかしい祖国の土を踏むときには、
すぐれた名誉は失せる代りに、私の寿命は長(かろうと)。
〔くあろうし、早急には最期きわの際に到りはすまいと〕。¹⁾

ホメロスの叙事詩は、いわゆる長短短六歩格 (dactylic hexameter) を用いて書かれている。すなわち、1行は6つの詩脚 (foot) で構成され、ひとつの詩脚は長音節ひとつと短音節2つか (— U U)、あるいは長音節2つ (— —) から成る。ただし、行末の6番目の詩脚は長長 (— —) あるいは長短 (— U) に限られる。長音節とは長母音を含む音節、あるいは短母音に2つ以上の子音が続く場合である。二重母音を含む音節も一般には長音節とみなされるが、語末に立ち、つぎの語が母音で始まる場合は単音節とみなされる。以上の規則にしたがって、表1の各行の下には韻律が示されている。

ギリシア語アルファベットでは母音 a (= α) の長短は文字のうえで表されない。したがって、410行目の theà “goddess”の語末母音は実際には長いので、韻律からははずれてはいない。また、同じ410行目の argurópeza “silver-footed”の語末から2つ目の音節についても、ギリシア語の z (= ζ) という文字は/dz/あるいは/zd/という子音連続を表しているために、長音節と数えられ、やはり韻律は守られている。問題は415行目の4番目の詩脚である。ここでは、長音節2つ (— —) の長長という詩脚が予想される。2番目の長の位置には、dēròn “long”の長い ē を含む音節がくるので問題はない。ところが、1番目の長の位置に立つのは、epì “to”の短い ì を含む音節である。また、ì の後には d という子音ひとつしか後続しないため、韻律が要求する長音節には決してなら

1) 呉茂一 (訳) 『イーリアス (中)』 (岩波書店、1956年) から。

ない。

このような韻律からの逸脱は、ホメーロスのテキストにみられるまったく不可解な現象であり、ギリシア語の視点からだけでは説明不可能に思える。しかしながら、比較方法はこの問題に対して整合性のある説明を与えてくれる。表2に示したのは、語頭に d を含むギリシア語とそれに対応するサンスクリット語と古典アルメニア語の形式である。

(表2)

	ギリシア語	サンスクリット語	古典アルメニア語
“ten”	déka	dáśa	tasn
“brother-in-law”	daér	devṛ	taygr
“fear”	deídi-	dviṣ (“hate”)	erki-
“twice”	dís	dvís	erkic’s

表2のデータから、ギリシア語の d に対して、サンスクリット語と古典アルメニア語は、表3にみられるように、2つの違った対応を示していることが分かる。

(表3)

ギリシア語	サンスクリット語	古典アルメニア語	印欧祖語
d	d	t	*d
d	dv	erk	*dw

この2つの対応は、ともに語頭位置という同じ環境にみられるものであるから、ギリシア語では d に融合しているが、祖語の段階の異なる2つの音(あるいは音連続)を指し示していると推定できる。ひとつめの対応については、古典アルメニア語では、ゲルマン語派にみられるグリムの法則に類似した子音推移が起こったので(サンスクリット語 dáśa “ten”、ギリシア語 déka、ラテン語 decem、ゴート語 taihun、古典アルメニア語 tasn)、祖語の段階では *d であったと考えてよい。他方、2つめの対応は、対応を設定する際の警鐘としてメイエが指摘した特異

な対応の例である²⁾。つまり、サンスクリット語の dvau “two” やゴート語 twai などから再建される印欧祖語の *dw- は、古典アルメニア語において erk- で現れる (erk- < *rk- < *dw-。*d が *r になるロタシズムという変化は象形文字ルウィ語などにもみられる。さらに、古典アルメニア語やギリシア語、ヒッタイト語などの地中海東部とその周辺の言語では、語頭位置に r が来ないために、古典アルメニア語では e という母音が添加されている)。この *dw- は、サンスクリット語ではそのまま保存されているが、ギリシア語ではその先史において *w が落ちた結果、d となった。

以上の分析からつぎの結論が導かれる。言うまでもなく、ホメーロスの叙事詩は、実際に記録される以前から、吟唱されていた。その段階においては、うえで問題となった dēròn は dwēròn と読まれていたのである。dēròn は古典アルメニア語の erkar “long” に対応するので、本来語頭に *dw- があったことが保証される (表3参照)。したがって、415 行目の epì dēròn は、もともとは epì dwēròn であった。この場合、epì の母音 ì の後には dw という子音 2 つが続くために、ì を含む音節は長音節となる。したがって、もともとは韻律の違反がなかった。韻律に合わないようになった理由は、ギリシア語内部の後の先史で *dw- d- という二次的な音変化が生じたからである³⁾。

1. 2. 比較言語学から見えること

英国ケンブリッジ大学の著名な考古学者であるコリン・レンフリュー教授は、印欧語民族の故地がアナトリアにあり、彼らはエーゲ海を渡った後、中央ギリシアに最初の農業社会を築き、その後農業経済の拡散にともなって、北、北東、西、北西に移動したという大胆な説を提案した⁴⁾。彼の考えによれば、アリア人は黒海の北側を西から東に向かい、最終的にインド・イランに到達したことになる。私は考古学を専門としない

2) Antoine Meillet, *La méthode comparative en linguistique historique* (H. Aschehoug & Co, 1925) の 6 頁を参照。

3) この音変化については、A. Meillet et J. Vendryes (1968) *Traité de grammaire compare des langues classiques*. H. Champion の 47 頁でも指摘されている。

4) Colin Renfrew (1987) *Archaeology and language: The puzzle of Indo-European origins*. Jonathan Cape.

ため、従来の定説と根本的に異なるレンフリューの見方の妥当性を考古学的に論じる資格はない。しかしながら、言語学的な観点に立って考えるならば、彼の見方にはやはり首をかしげざるをえない。農業経済と言語の伝播が軌を一にするという彼の考えが正しいと仮定するなら、古代ギリシア語は、はるか東方で話されるようになったサンスクリット語よりも、エーゲ海の対岸のアナトリアで話されていたヒッタイト語に言語学的により近いと当然予想される。しかしながら、事実はそうではない。古代ギリシア語とサンスクリット語のあいだには音韻の面でも、形態の面でも細部にわたり類似点が多いのに対して、ヒッタイト語は両者とまったく異なり、文法体系がきわめて単純である。古代ギリシア語とサンスクリット語の文法的特徴にみられる顕著な類似は、レンフリューの見方ではまったく説明不可能である。

また、レンフリューは同じ著書の 88 頁で、印欧祖語の時代には馬が存在していなかったと主張している。その理由は、考古学的にみて馬がいたことを示す確実な根拠が見つかっていないからである。しかしながら、言語学的な立場からはこの主張を受け入れることはできない。さて、うへの表 1 のホメーロスの 415 行目には *ōka* “swiftly” という副詞が使われている。この副詞と関連づけられる形容詞は *ōkús* “swift” であり、これはサンスクリット語 *āsú-* と対応し、祖形は $*(h_1)ōku-$ “swift” と再建することができる。この $*(h_1)ōku-$ “swift” という形容詞が $*(h_1)ēkwos$ “horse” と再建される名詞（サンスクリット語 *aśvas*、ラテン語 *equus*、ギリシア語 *híppos* などからこのように再建される）と派生関係にあったことは、形態的にみても意味的にみても確実である。この二つの形容詞と名詞を関連づける派生のプロセスは、分派諸言語においてもはや生産的ではなかったため、 $*(h_1)ōk-$ “swift” という形容詞も、 $*(h_1)ēkwos$ “horse” という名詞もともに印欧祖語の時期に存在していたと考えざるをえない。つまり、馬が駆ける姿を見て、「馬」から「速い」という形容詞を印欧語民族は作り出したに違いない。以上の分析によって、レンフリューの主張はしりぞけられなくてはならない。この例が示しているように、比較言語学的な分析は、言語だけでなく、祖語の時代の社会や文化がどのようなものであったかという推定に向けても寄与することができる。

2. リグ・ヴェーダのテキストから

前節では、ホメーロスの叙事詩にみられる韻律からの逸脱に対して、比較言語学的な分析を試みた。その結果、ギリシア語内部の視点からだけでは説明不可能に思える現象に対して整合性のある解釈が与えられた。この節では、インド語派の最古層の言語で、紀元前 1,200 年頃に成立したと推定されているリグ・ヴェーダにみられる韻律の問題を比較言語学のコンテキストのなかで考えてみたい。

表 4 に示したのは、リグ・ヴェーダ第 1 巻の 1.7 と 1.8 の 2 連である。

(表 4)

リグ・ヴェーダ 1. 1. 7a-c	
úpa tvāgne dive dive	アグニよ、日にけにわれら汝に近づく、
dóṣāvastar dhiyá vayám	詩想を伴い、頂礼を捧げつつ、
námo bháranta émasi	暗黒の中に輝く[神]よ。
1. 1. 8a-c	
rájantam adhvarāṇām	祭事の主宰者、天則の保護者、
gopám ṛtásya dīdivim	光彩を放つ[神]、
várdhamānam své dáme	自己の居所に増大する[汝に近づく] ⁵⁾

リグ・ヴェーダの韻律を支配するのは、音節の数である。表 4 では gāyatrī という韻律が用いられているが、gāyatrī では、1 行 (pāda, verse) が 8 音節から成り、3 行で 1 連 (ṛc, stanza) を構成する。1.7 では、そこに含まれる 3 つの行がそれぞれ 8 音節であるので、問題はない。しかしながら、1.8 では、2 番目の行 (1.8b) は 8 音節であるが⁶⁾、1 番目の行 (1.8a) と 3 番目の行 (1.8c) は、このままでは 7 音節である。このうち、1.8c については、své “own” という 1 音節の語が含まれている。リグ・ヴェーダにおいては、dyauh “day” や śvā “dog” といった 1 音節語

5) 辻直四郎(訳)『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波書店、1970年)から。

6) ṛ という文字は母音であることに注意されたい。

が、長い音節の後などで2音節の diauḥ や śuā として読まれることはよく知られている⁷⁾。したがって、1. 8c の své も同じように sué と読めば、8音節になり韻律の違反はない。そうすると問題となるのは、1. 8a の行である。

さて、1. 8a に現れる adhvarāṇām “religious service”は複数属格の形であるが、リグ・ヴェーダにおいて複数属格語尾-ām は、それが出現する事例のおよそ三分の一で、2音節の-aam と数えられなければ韻律に合わないということが知られている⁸⁾。同様に、a-語幹の単数奪格語尾-āt も-aat というように2音節として読まれなければ、韻律に合わないケースが多くみられる⁹⁾。たとえば、リグ・ヴェーダ第8巻の11. 7b に記録されている sadhásthāt “from the place”は sadhásthaat と読まれなければならない。

内の再建法を適用するならば、2音節と数えられるこれらの長母音は、もともとは母音間に子音を持つ *-VCV-という連続であったと解釈することができる。すなわち、母音間で子音が脱落し、その後母音融合によって長母音が生じたという解釈である (*-VCV- > *-VV- > -V̄-)。そして2音節として数えられるのは、母音融合が起こる前の古い状態を反映しているからであると考えられる。つぎに問題となるのは、母音間で脱落した子音の種類である。インド・イラン語派では、母音間の子音は一般に保存されるが、唯一脱落したと考えられる子音がある。それはいわゆる喉音 *H (laryngeal) である。以上から、リグ・ヴェーダの複数属格語尾-ām (-aam) は *-VHVm、単数奪格語尾-āt (-aat) は *-VHVd

7) 語頭の子音連続における2番目の子音 y, v が母音になるという現象が単音節語に限られていることは、Lindeman によればはじめて指摘された。2音節語である svapnaḥ “sleep”に対する suapnaḥ などの例はみられない。F. O. Lindeman (1965) “La loi de Sievers et le début du mot en indo-européen.” *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 20 を参照。

8) E. V. Arnold (1905) *Vedic metre*. Cambridge University Press の92頁を参照。adhvarāṇām は a-語幹男性名詞の複数属格である。古典サンスクリット語の時代では-ānām が a-語幹名詞の一般的な複数属格語尾であるが、リグ・ヴェーダにはより古い-ām という複数属格語尾も記録されている。この語尾はギリシア語-ōn に規則的に対応する。サンスクリット語の内部の歴史で属格語尾が-ām から-ānām に変化した原因は、atmanām “of souls”に代表される n-語幹名詞からの形態的影響と考えられる。

9) 同じく Arnold (1905) の99頁を参照。

(古ラテン語の *-ōd を参照) に遡ると考えられる。母音間に喉音を含むこれらの語末形式の再建は、ゲルマン語とバルト語にみられる語末縮約の問題を理解するうえで重要な手掛かりを与えてくれる。

2. 1. ゲルマン語派・バルト語派の語末音節縮約

ゲルマン祖語には、語末音節において2種類の長母音があったと一般にみなされている。この根拠になるのは、たとえばつぎのようなペアである。ゴート語 *baira* [-a] “I carry” < *-ō (対応するギリシア語 *phérō* “id.” < *-ō を参照)、ゴート語 *ga-leiko* [-o:] “like, similarly (本来は単数奪格)” < *-ōd (対応するサンスクリット *aśvāt* “from a horse” < *-ōd を参照)。この2つの例は、ともに語末音節に長母音を持つ祖形に遡るにもかかわらず、語末音節の母音に長短の長さの違いがみられる(*baira* [-a]では短く、*ga-leiko* [-o:]では長い)。このような事実から、多くのゲルマニストは、直接の証拠はもろくないが、語末音節に2種類の音調における対立があったと考えた。そして、短くなる音節と長いままの音節は、本来それぞれ *stoßtonig* (acute)および *schleiftonig* (circumflex)として特徴づけられていたと考えた¹⁰⁾。しかしながら、この対立は音調ではなく、モーラ数によるという見方が後に出され、前者を2モーラ長母音 (bimoric)、後者を3モーラ長母音 (trimoric) と呼ぶようになった¹¹⁾。この見方によれば、ゲルマン語の先史において、2モーラの語末音節は1モーラに、3モーラの語末音節は2モーラに縮約されたと考えられる。

うへの語末音節の縮約は、ゲルマン語派だけに孤立してみられる現象ではない。類似した現象が、バルト諸語にもみられる¹²⁾。リトアニア語では、語末の acute の長音節は短縮するが、語末の circumflex の長音

10) たとえば、H. Hirt (1892) “Vom schleifenden und gestossenen Ton in den indogermanischen Sprachen.” I & II. *Indogermanische Forschungen* 1 や H. Krahe & W. Meid (1969) *Germanische Sprachwissenschaft I. Einleitung und Lautlehre*. Walter de Gruyter の 132 頁以下をみられたい。

11) たとえば、G. S. Lane (1963) “Bimoric and trimoric vowels and diphthongs: Laws of Germanic finals again.” *Journal of English and Germanic Philology* 62 をみられたい。

12) ゲルマン語派やバルト語派ほど顕著ではないが、同じく北方のスラブ語派にも同じ現象がみられる。『日本言語学会第 125 回大会予稿集』の 22 頁を参照。

節は長いまま保持される。mergà[-a] “female virgin” (語末は acute) に対して、mergōs [-o:] “id. (gen. sg.)” (語末は circumflex)。これは、いわゆる「レスキーンの法則」と呼ばれる現象である¹³⁾。この場合の acute と circumflex が意味するところは、音調の違いではなく、音節の核 (nucleus) の性質の違いである¹⁴⁾。つぎのリトアニア語の例は、う えであげたゴート語 baira [-a] と ga-leiko [-o:] とにそれぞれ文法機能の 点で対応する形式である。vedù [-u] “I lead” < *védūo < *védō¹⁵⁾。vilko [-o:] “of a wolf (単数属格)” < *ōd¹⁶⁾。語末長母音の短縮の有無に 関して、ゴート語とリトアニア語のあいだで同じ文法形式がまったく並行的 なふるまいをすることから、それぞれの語派にみられるこれらの現象は 統一的に把握する必要がある。

2. 2. 喉音はいつ消失したのか

これまで議論が必要以上に煩雑にならないように、ゲルマン語派とバルト語派の語末形式に意図的に喉音を再建しなかった。しかしながら、すでにう えでみたリグ・ヴェーダの事実を合わせて考えるならば、単数奪格は *-oHed と再建できる。また、ゴート語 baira に代表される能動態動詞 1 人称単数は *-oH と再建されることを近年の比較文法は明らかにしている。以上から対応関係を整理すると、表 5 のようになる。

13) A. Leskien (1881) “Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen.” *Travaux de cercle linguistique de Prague* 4. この現象は語末に限られている (形容詞の非限定形 gerà “good” に対して、後倚辞の付いた限定形 geró-ji “id.” を参照)。

14) バルト語派では、すべての長母音と二重母音には、acute と circumflex の対立が存在していた。circumflex が無標であるのに対して、acute にはデンマーク語の stød やラトヴィア語の狭容音調 (broken tone) に類する声門の狭容という特徴がともなっていたと考えられる。ここでは、音節核の特徴としての acute を下線でマークする (mergà [-a] < *mergā に対して mergōs [-o:])。矢野通生 (1985) 「リトアニア語アクセント論覚え書き」『言語研究』87 では、acute と circumflex という用語の使い方に関して、音調としての特徴と音節核としての特徴が区別されていないため、奇妙な議論が展開されている。

15) リトアニア語の *ō は、近隣のラトヴィア語、古高地ドイツ語、フィンランド語と同様に、*uo になった。*uo から u への変化はレスキーンの法則による。acute の語末音節が直前のモーラからアクセントを引き寄せる現象は、「ソシュールの法則」としてよく知られている。

16) リトアニア語の a-語幹名詞の単数属格は、歴史的には単数奪格である。

（表 5）

	ゴート語	リトアニア語	印欧祖語
能動態 1 人称単数	baira [-a]	vedù [-u]	*-oH
単数奪格	ga-leiko [-o:]	viľko [-o:]	*-oHed

表 5 の対応から、ゲルマン語の 2 モーラ長母音とバルト語派の acute 音節核は *-oH という語末に遡るのに対して、ゲルマン語の 3 モーラ長母音とバルト語派の circumflex 音節核は *-oHed という語末に遡ることが分かる。このうち後者については、それぞれの語派内部で喉音の消失にともなう代償延長と母音融合によって 3 モーラ長母音が生じ、さらにバルト語派では後に 2 モーラ長母音が acute 音節核として特徴づけられるようになったのに対して、3 モーラ長母音は circumflex 音節核を持つようになったという見方が可能になる¹⁷⁾。

以上の議論を要約するとつぎのようになる。印欧祖語の時期には、2 種類の長母音があった。

- a) 通常の延長階梯長母音（たとえば、s-アオリスト 3 人称単数 *wéǵh-s-t “carried”）
- b) 母音融合によって生まれた長母音（たとえば、主格複数 *wĺk̑ōs “wolves” < *-o-es）

祖語から諸言語が分岐した段階で、さらにもう 2 つの長母音が加わった。

- c) 代償延長による長母音（たとえば、能動態 1 人称単数 *bhéro “bore” < *-o-H）
- d) 母音間の喉音の消失による代償延長と母音融合による長母音（たとえば、o-語幹名詞単数奪格 *-ōd < *-o-Hed）

a)~d) の 4 種類の長母音は、ほとんどの語派でひとつに融合した。しか

17) この見方は、J. Jasanoff がいくつかの論考で示しているが、もっとも最近の体系的な取り扱いは The Thirteenth Annual UCLA Indo-European Conference（2001 年 11 月、UCLA）でなされている。

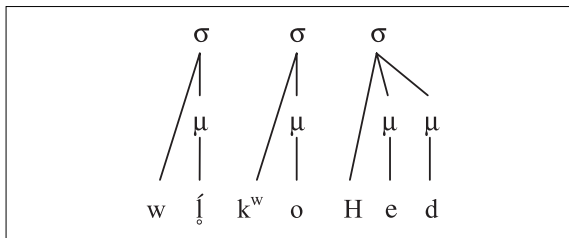
しながら、ゲルマン語派とバルト(・スラブ)語派では、a)~c)の3つは2モーラ長母音になったが、d)は1モーラ増えて3モーラ長母音になった。

しかし、この見方には問題点がないわけではない。もっとも重大な問題点として、つぎの2つが考えられる。

- (1) 3モーラの長母音の存在は、通言語的にきわめてまれである。
- (2) 代償延長によって消失する子音は、通常コーダ(音節末音)にあり、オンセット(音節頭音)にはない¹⁸⁾。

(1)については、音韻的に3モーラの長母音を持つ言語として、エストニア語がよく引用される。しかしながら、エストニア語においても3モーラの長母音はアクセントが置かれる第1音節に限られている。この点で、必ずしもアクセントが置かれていたとは限らない語末においてのみ3モーラの長母音が生じたという見方は疑わしく思える¹⁹⁾。また、(2)については、図1から明らかなように、単数奪格 **-oHed* においてHはオンセットの位置にあるため、Hの消失によって代償延長が起こったとは考えにくい。

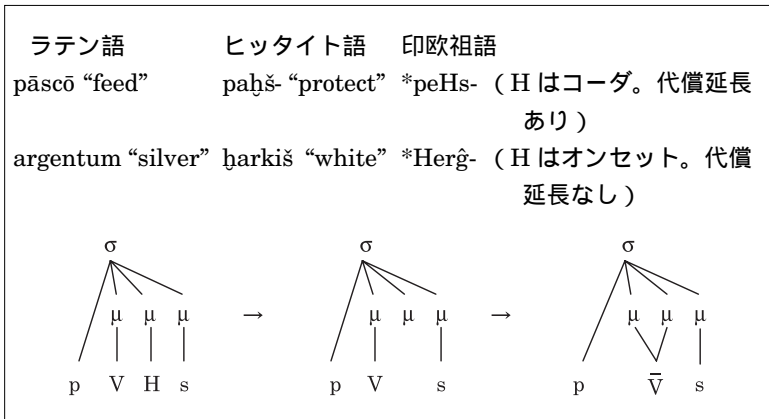
(図1)



実際に、代償延長がHの消失によって引き起こされるのは、図2のラテン語とヒッタイト語の例を比べれば分かるように、Hがコーダに位置する場合である(ヒッタイト語ではHが保持されている)。

18) B. Hayes (1989) "Compensatory lengthening in moraic phonology." *Linguistic Inquiry* 20 を参照。
 19) P. Ladefoged and I. Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*. Blackwell の 320 頁によれば、音韻的に3段階の母音の長さを区別する唯一の言語は中米のミヘ語という。

(図 2)



したがって、ゲルマン語派とバルト（・スラブ）語派において、母音間の H は、リグ・ヴェーダの場合と同様に、単に脱落するだけであり、モーラ数に変化がなかった可能性が高い。類似する例をあげると、たとえばギリシア語では母音間の *w、*y、*s は脱落したが、モーラ数に何ら影響は与えられなかった。

以上に示した問題点を考慮に入れると、語末に 3 モーラの長母音が生まれたという蓋然性はきわめて低い。しかしながら、一方でこの場合の語末に H が存在していたということは疑いようのない事実である。喉音理論が確立してからも、ゲルマン語派の語末音節縮約の問題やバルト・スラブ語派の音節核の特徴としての acute 付与についての先行研究においては、いずれも H の消失が語末音節縮約や acute 付与よりも先に生じたという暗黙の前提に立っていた²⁰⁾。しかしながら、それを裏づける実質的な根拠は何もないのである。逆に、acute の付与（共通バルト・スラブの時期の変化）の後も、H が保持されていたことを示す例がある。たとえば、それは古教会スラブ語 ā-語幹単数属格 ženy “of a

20) H はアナトリア語派に部分的に保存されているにすぎず、他のどの語派にもその存在を裏づける直接の根拠はない。したがって、アナトリア語派以外の語派ではそれぞれの先史の早い時期に H が消失したとアプリアリに考えること自体は、なんら不思議ではない。

woman”である。この形式はつぎのようにして導かれる。*ženy* < **-ūs* < **-ōs* < **-oH₂os* < **-aH₂as* < **-eH₂-es*。もし H が先に消失したと考えるなら、***žena* < **-ās* < **-aH₂as* < **-eH₂-es* が予想されるが、このような形式は実際には記録されていない。スラブ語派内部の **a* > **o* という変化の後になお H が存続していたと考えなければいけないため、当然より古いバルト・スラブの時期にも H は保持されていたことになる。

ここで新しく提案したいのは、これまでの考え方とは逆に、ゲルマン語派の語末音節縮約やバルト・スラブ語派の acute 付与の段階では、母音間の H はまだ保持されていたという見方である²¹⁾。一般言語学的にみても、オンセットの子音がコーダの子音よりも保持されやすいことはよく知られている。この新しい見方では、これまでの分析で常に問題とされてきたゴート語の *baira* [-a] と *ga-leiko* [-o:]、リトアニア語 *vedù* [-u] と *vilko* [-o:] は、それぞれ表 6 と表 7 のようにして導き出されることになる²²⁾。

(表 6)

ゴート語の <i>baira</i> と <i>ga-leiko</i> の先史		
(H はコーダの位置に立つときに消失し、先行母音を延長する)		
	*-o-H	*-o-Hed
コーダの H の消失	*-ō	—
語末音節短縮	*-a	*-oHd
残りの H の消失	—	*-ōd
	<i>baira</i> [-a]	<i>ga-leiko</i> [-o:]

21) この提案では、バルト・スラブ祖語の段階においてすべての長母音と二重母音が acute として特徴づけられることになる。

22) 表 7 に示された一連の変化のなかには、歴史的な順序づけが正確に決定できないものも含まれている。

（表 7）

リトアニア語 <i>vedù</i> と <i>viľko</i> の先史		
	*-oH	*-o-Hed
コーダの H の消失	*-ō	—
acute の付与（バルト・スラブ規則）	*-ō	—
o > *a（バルトの規則）	—	*-aHad
残りの H の消失	—	*-ā d
*ō > *uo	*-uo	—
ソシュールの法則	*-ūo	—
レスキーンの法則	*-u	—
*ā > *ō	—	*-ō d
	<i>vedù</i>	<i>viľko</i>

このように考えると、うえで示した2つの問題は解消される。つまり、語末に3モーラの長母音は決して生まれなかったことになり、また代償延長の規則が働いたとき、Hはオンセットではなく、コーダの位置にあったことになる。この分析結果は、類型論的立場からも、理論的立場からも望ましいものと言えるであろう。

3. 古リトアニア語のテキストから

リトアニア語はバルト語派に属する言語であり、現在も使用されているが、最初の文献記録は16世紀に遡る。表8に示したのは古いリトアニア語のテキストからの一節である。

（表 8）

<p>1. Būvo karāliaus duktė. Tėvai jai dāvė žiedą ir liėpė niėkur nepamėsti. Jinaĩ nuėjo į dūmburią praūstis būrną. Ir įpuolė žiedas į dūmburio gilumą. Niėks negalėjo pasiėkti. Jinaĩ atsistójo ir vėrkia. Žaltýs atėjęs kláusia: „Kō tu verkĩ?“ Mergáitė sáko: „Turėjau žiedą ir nupuolė į dūmburio dūgną; 5. niėks negāli pasiėkti.“ Žaltýs sáko: „Būk mào patĩ, tai pasiėksiu!“ Mergáitė sutĩko, sáko: „Geraĩ, būsiu!“ Žaltýs sákas: „Utárminke atvažiúosiu į vestuvėš.“ Ir išėmėš pàdavė jai žiedą.²³⁾</p>

23) A. Senn (1957) *Handbuch der litauischen Sprache* II. Carl Winter の24頁以下に所収されているメルヒェンから。

王様の娘がいた。彼女に両親は指輪を与えて、どこに行っても失わないように命じた。彼女は顔を洗うために池に行った。すると指輪が池の深みに落ちてしまった。誰も取ることができなかった。彼女はじっとし、そして泣く。アオヘビがやって来て、尋ねる。「なぜ泣いているの。」少女は言う。「指輪を持っていたけど、池の深みに落ちてしまったの。誰も取ることができないの。」アオヘビは言う。「わたしの妻になりなさい。そうすれば取ってあげよう。」少女は同意して、言う。「わかったわ。なりましょう。」アオヘビは「火曜日に結婚式に来るよ。」と言って、指輪を取ってから彼女に渡した。

3. 1. 対応の幻想

表8には、5行目に pasieksiu “I will reach”、6行目に būsiu “I will be”と atvažiuosiu “I will arrive”という1人称単数未来形が使われている。これらの語末にみられる-siu という要素は、前節で触れたレスキーンの法則によって、*-siō (> *-siuō > -siu)から導くことができる。メイエは、このリトアニア語の1人称単数未来形-siuを、インド・イラン語派の未来形(サンスクリット語 vak-syá-mi “I will speak”、ガーサ・アヴェスタ vak-šyá “id.”)に関連づけている²⁴⁾。この対応の設定は一見まったく問題がないようにみえるが、はたして妥当だろうか。

リトアニア語の未来形のパラダイムは、dúoti “to give”を例にとると、表9のようになる²⁵⁾。これに対応するサンスクリット語 dā- “id.”は表10のとおりである。

(表9)

sg. 1 dúosiu	du. 1 dúosiva	pl. 1 dúosime
2 dúosi	2 dúosita	2 dúosite
3 duōs		
participle dúosiant-		

24) A. Meillet (1937) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. H. Champion の214頁を参照。

25) よく知られているように、リトアニア語の3人称では、数の区別がみられない。

(表 10)

sg. 1 dāsyāmi	du. 1 dāsyāvas	pl. 1 dāsyāmas
2 dāsyasi	2 dāsyathas	2 dāsyatha
3 dāsyati	3 dāsyatas	3 dāsyanti
participle dāsyant-		

表 9 の定動詞部分のうち、3 人称の *duōs* は **dōs-t(i)* に遡るために²⁶⁾、語幹形成母音 *-*e/o*-を持っていないという点でパラダイムから孤立しているように見える²⁷⁾。しかしながら、1 人称と 2 人称の形式についても、共通要素として -*i*- はあるけれども、1 人称単数 *dúosiu* (< *-*siō* < *-*o-h*₂) を除いて、やはり語幹形成母音 *-*e/o*- を欠いている²⁸⁾。この語幹形成母音 *-*e/o*- のパラダイムのなかでの欠如が説明されない限り、よく引き合いに出されるサンスクリット語 *dāsyāmi* とリトアニア語 *dúosiu* の対応は受け入れられず、両言語における独立した並行的発展と考えざるを得ない。

定動詞の場合と違って、分詞については、表 9 のリトアニア語 *dúosiant-* と表 10 のサンスクリット語 *dāsyant-* は、正確に対応する。さらに、ロシア版の古教会スラブ語のテキストに残っている、孤立した分詞の形式 *byšęšt-/byšqšt-* も同じ形成法をとっている²⁹⁾。この古教会スラブ語の分詞は、**bhūsye/ont-* に遡り、いわゆる「*ruki* 規則」と「口蓋化第一規則」などによって導かれる形式で (> **būxye/ont-* > **būšye/ont-*)、リトアニア語 *búsiant-* やアヴェスタの *búšiiant-* に比定できる。4 つの主要言語において未来分詞が同一の形成法を示しているために、

26) Ch. Stang (1966) *Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen*. Universitetsforlaget の 398 頁を参照。

27) いわゆる *athematic* のタイプである。これに対して *thematic* のタイプは、母音交替をとまわず、語尾直前に常に *-*e/o*- があらわれることにより、語幹が一定化する新しい生産的なタイプである。たとえば、1 sg. **bhér-o-h*₂ “I carry”、2 sg. **bhér-e-si*、3 sg. **bhér-e-ti* をみられたい。

28) 1 人称が語幹形成母音を持つようになったという例は、たとえば古教会スラブ語の *s-* アオリストのパラダイムにもみられる。1 sg. *rěx* (< **rěk-s-o-m*)、1 du. *rěxově* (< **rěk-s-o-vě*)、1 pl. *rěxom* (< **rěk-s-o-mos*) に対して、2 pl. *rěste* (< **rěk-s-te*)、3 pl. *rěšę* (< **rěk-s-nt*)。詳しくは、K. Yoshida (1988) “A typological parallel between Latin and Old Church Slavic.” *Studia Phonologica* 22.

29) A. Meillet (1934) *Le slave commun*. H. Champion. の 201 頁を参照。

*-sye/ont-によって特徴づけられる未来分詞は、疑いなく祖語から伝承したものと考えられる。

3. 2. 未来形の2つのタイプ

リトアニア語の1人称と2人称未来形について、それらは3人称未来形と同じく、本来、語幹形成母音をとまわらない *athematic* のタイプであったとジャザノフは考えている。彼は、文献資料には残されていないが、比較文法の観点から前リトアニア語の時期に存在したと推定される三人称複数未来形、たとえば *dós-nt(i) に、一人称と二人称にみられる -i の起源を求めている³⁰⁾。つまり、バルト語派やスラブ語派に生じた *ŋ > *in という音変化によってつくられた *dós-int(i) (< *dós-nt(i)) の語尾初頭の i が、語幹の一部と再解釈された結果 (*dós-int(i) → *dósi-nt(i))、*dósi- という新しい語幹がパラダイムに広がったと考えている³¹⁾。この解釈が正しいならば、リトアニア語の未来形の定動詞部分は語幹形成母音がない *athematic* のタイプであったことになる。

リトアニア語の定動詞がとる未来形は、*athematic* である点で、非常に古い形成法を保持していると考えられる。このタイプは、他のいくつかの言語にもみられる。まず、イタリック語派に属するオスク語とウンブリア語をみてみよう。両言語には、たとえば、つぎのような未来形が記録されている。

オスク語、ウンブリア語 *fust* “erit (Latin), (s)he will be”
ウンブリア語 *deiuast* “iurabit (Latin), (s)he will swear”
ウンブリア語 *est* “ibit (Latin), (s)he will go”

30) J. Jasanoff (1978) *Stative and middle in Indo-European*. Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck の 106 頁を参照。

31) 語幹と語尾の再分節によって、語幹のタイプが変わることはしばしばみられる。たとえば、「足」を意味する名詞は、ラテン語単数主格 *pēs* (< *ped-s)、単数属格 *pedis* (< *ped-es) では、語根 *ped- に主格語尾 *-s、属格語尾 *-es が直接付与される語根名詞であるが、ゲルマン語派ではどのハンドブックも *u*-語幹名詞として扱っている（たとえば、ゴート語単数主格 *fotus*、単数属格 *fotaus*）。その理由は、単数対格語尾 *-m(*pod-m) が音変化によってゲルマン祖語で *-um になった後、語尾は *-um ではなく、*-m と再解釈された結果、*u* で終わる新しい語幹がパラダイムに広がったからである。

バックは、これらの-stで終わる3人称の形式が thematic の *-set から母音脱落 (syncope) によってつくられたとみなしている³²⁾。確かに、オスク語とウンブリア語には、多くの位置に syncope が生じている。しかしながら、バックの見方を支持する根拠は、印欧語の s-未来は s-アオリストの短母音接続法から導かれたというアプリオリな考え以外には何もないである。この先入観を取り除くならば、オスク語とウンブリア語の未来形が本来 thematic であったという見方はその基盤を失うことになる。むしろ、文字通りに-stは最初から athematic であり、その状態が保持されていると考えるほうが有力に思える。その根拠となるのは以下の事実である。

オスク語とウンブリア語と同じイタリアック語派に属するラテン語においては、初期ラテン語の文献資料に future perfect と一般に呼ばれる未来形が記録に残っている³³⁾。たとえば、直説法として、1人称単数 faxō、2人称単数 faxis、3人称単数 faxit という形式がある。これらは明らかに語幹形成母音 *-e/o-を持つ thematic の *dhh₁k-se/o-という語幹に遡る。ところが、対応する接続法の1人称単数 faxim、2人称単数 faxīs、3人称単数 faxit は、同じように thematic と考えることはできず、希求法の零階梯の接尾辞 *-ih₁-によって拡張された faxī- (< *dhh₂k-s-ih₁-) という athematic の語幹によって特徴づけられているととらえなければならぬ³⁴⁾。この事実は、faxōなどの直説法が汎インド・ヨーロッパ語的にみられる規則的な thematic のタイプへの移行を蒙ったのに対して、本来の athematic の特徴は接続法である faxim などに継承されていると考えることによって、もっとも自然に説明される。

直説法 *fak-s-m (athematic) faxō (thematic)

接続法 *fak-s-ī-m (athematic) faxim (athematic)

32) C. D. Buck (1904) *A grammar of Oscan and Umbrian*. Georg Olms の 169 頁を参照。

33) 具体例は、A. Ernout (1953) *Morphologie historique du latin*. Klincksieck の 162 頁以下に詳しい。

34) 古典期のラテン語では、*-ye/o-によって拡張された形式に、接続法のマーカ - *-e/o- を付与することによって、未来形がつくられる (*dhh₂k-ye/o-e/o- > 1 sg. faciam, 2 g. faciēs, 3 sg. faciet)

したがって、イタリック語派に属するオスク語、ウンブリア語とラテン語の s-未来形は、本来すべて athematic のタイプであったと考えられる。

同じ athematic の s-未来の形成法が古期アイルランド語にも見いだされる。*leg- “lie”、*aneg- “protect”、*sed- “sit”、*reg- “arise”、*ret- “run”、*tek- “flee”という6つの語根からつくられる以下の形式が記録に残っている³⁵⁾。

- 3 人称単数-lé < *-less < *-leg-s-ti
- 3 人称単数-ain < *-aness < *-aneg-s-ti
- 3 人称単数 seiss < *sed-s-ti-s
- 3 人称単数-ré < *-ress < *-reg-s-ti
- 3 人称単数 reiss < *ret-s-ti-s
- 1 人称単数-tess < *-tek-s-mi

古期アイルランド語の他の s-カテゴリー（s-アオリスト、s-接続法、重複を持つ s-未来）では、3 人称単数だけが athematic であり、パラダイムの他の位置は thematic であるという二次的な改変がなされている³⁶⁾。したがって、うえに示した6つの形式のうち、はじめの5つは、同じように二次的に athematic のタイプになった可能性が排除できない。しかし、最後の-tess “I will flee”は1 人称単数であるにもかかわらず、athematic である。もし起源的に thematic であったとするならば、u の音色を持つ **tius (< *-tessū < *-tek-s-ō < *-tek-s-o-h₂) が予想されるが、この形式は記録されていない。したがって、これらの6つの形式は、リトアニア語、オスク語、ウンブリア語、初期ラテン語の s-未来

35) R. Thurneysen (1975) *A grammar of Old Irish*. Dublin Institute for Advanced Studies の 410 頁以下を参照。古期アイルランド語の動詞体系には、独立してあらわれる絶対形 (absolute form) と前接辞類が付与される連結形 (conjunct form) との対立がみられる。その起源は、従来から問題とされているが、私見では W. Cowgill (1975) “The origin of the Insular Celtic conjunct and absolute verbal endings.” *Flexion und Wortbildung*. Reichert のなかで示された見方がもっとも優れているように思う。

36) たとえば、s-アオリストの3 人称単数-mór “(s)he magnified” (< *-mārass < *-māra-s-t)、s-接続法の3 人称単数-gé “(s)he might pray” (< *-gess < *-ged-s-t)、重複を持つ s-未来の3 人称単数-gig “(s)he will pray” (< *-gigess < *-giged-s-t)にみられるように、3 人称単数形はすべて athematic である。

形と同様に、きわめて古い athematic のタイプの s-未来形を祖語の時期から継承していると考えられる。

同様に祖語の時期に遡る形式として、すでにみたように、*-sye/ont-によって特徴づけられる未来分詞があった。ところで、古典サンスクリット語においては、sya-未来は分詞に限らず定動詞においても広く用いられている。しかしながら、ヴェーダでは事情が異なる。マクドネルによれば³⁷⁾、sya-未来の定動詞形はリグ・ヴェーダでは稀で、わずか15の語根からしかつくられていない。ところが、分詞の形式は、vakṣyant- (< vac- “say”), dāsyant- (< dā- “give”), kariṣyant- (< kr̥ “make”), haniṣyant- (< han- “slay”)に代表されるように、多くの語根からつくられている。この事実は、サンスクリット語の定動詞形のsya-未来は分詞から2次的に広がったものであることを示唆している。このことから、本来、定動詞は athematic の s-未来形によって特徴づけられていたのに対して、分詞は *-sye/o-という接尾辞を持つ形式によって特徴づけられていたと言うことができる。祖語におけるこの2つの未来形の分布特徴は、リトアニア語においてももっとも忠実に保持されている。

4. 古期アイルランド語のテキストから

ケルト語派のなかでもっともまとまった文献資料を持つ言語は7～9世紀の古期アイルランド語で、さまざまなジャンルの資料が残されている。表11に示したのは、アイリッシュ・サガからの一節である。

(表11)

- | |
|---|
| <p>1. Ba imned la Fráech cen acallaim na ingine, sech ba hé less nod mbert. Laithe n-and atraig deud aidche do inlut dond abainn. Is hé tan dolluidsi ón ocus a hinailt do inlut. Gaibidsom a lláimsi. ‘An rim acallaim’, ol sé. ‘Is tú doróachtamar.’ ‘Is fo chen limas 5. ém’, ol ind ingen, ‘má chotíssind. Ní chumgaimm ní duit.’ ‘Ceist, in n-éláfa limm?’ ‘Ní élub ém’, ol sí, ‘ór issam ingen ríg ocus rígná.’³⁸⁾</p> |
|---|

37) A. A. MacDonell (1910) *Vedic grammar*. Karl J. Trübner の386頁を参照。

38) W. Meid (ed.) (1974) *Táin Bó Fraích*. The Dublin Institute for Advanced Studies の6頁からの引用。

フロイヒが来たのはそのためであったが、まだその娘と話す機会がないのは彼の悩みであった。ある日、フロイヒは夜明けに起き、顔を洗うために川へ行った。同じ時に、彼女が彼女の召使いと顔を洗いに来た。フロイヒは彼女の手を取る。「そのまま私と話をしてください。私たちが来たのは、あなたゆえなのです。」と彼が言った。「もしできることなら、ここからお迎えしたいところなのですが、でもあなたには何ひとつしてあげられません。」とその娘は言った。「私といっしょに逃げましょう。」と彼は言った。「いいえ、逃げませんわ。私は王と女王の娘ですから。」

4. 1. 「川」を意味する名詞

表 11 の 2 行目に abainn という単数与格の形式が記録されている。この名詞の単数主格は aub (< *abū < *abō) 「川」である。Avon 川やシェイクスピアの生誕地 Stratford-upon-Avon といった英語の地名にも、この形式は残っている。

この古期アイルランド語 aub(与格 abainn)の語源に関して、ハンブは注目すべき見解を示している³⁹⁾。彼はこの形式を、「水」を意味するヴェーダ āp- やアヴェスタ āp- の祖形 *h₂ep- に所有の接尾辞 *-h₃on が付与されたものと考えた (*h₂ep-h₃on)。つまり、「川」の原義は「(流れる)水を持っているもの」ということになる。この所有の接尾辞 *-h₃on は、ホフマンによって発見され、彼の名にちなんで「ホフマン接尾辞(Hoffmann suffix)」と一般に呼ばれている⁴⁰⁾。主格 aub では語末音節脱落により n が失われているが、与格 abainn では n はなお保持されている⁴¹⁾。アナ

39) E. Hamp (1972) “Palaic ḥa-a-ap-na-aš ‘river’” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 30.

40) K. Hoffmann (1955) “Ein grundsprachliches Possessivsuffix.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 6. たとえば、ガーサ・アヴェスタ maθraā (< *mentro-h₃ōn) “prophet < mantra-having” は、対応する名詞 maθra- “thought” から導かれる。ホフマン接尾辞の起源についての最近の考察として、G.-J. Pinault (2000) “Védique *dāmūnas-*, Latin *dominus* et l’origine du suffixe de Hoffmann.” *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 95 がある。

41) 語末の n の脱落は、ラテン語主格 homō “man” (< *-ōn)、対格 hominem (< *-ōnm)、サンスクリット語主格 aśmā (< *-ōn) “sky”、対格 aśmānam (< *-ōnm) などから判断すると、祖語の時期に生じた音変化と言える。

トリア語派では、対応する形式としてヒッタイト語 *ḥapaš* “river” とパラ語 *ḥapnaš* “id.” という a-語幹の形がある。このうち、前者は n を持たない主格から、後者は n を持つ与格などから二次的につくられたに違いない。

このハンプの提案は、古期アイルランド語 *aub* の語源を明らかにするだけでなく、これまで喉音理論の枠組みでアドホックな説明しか与えられていなかった問題に対する寄与でもある。そのアドホックな説明とは、無声閉鎖音に $*h_3$ が後続するとき $*h_3$ は先行子音を有声化するというものである。この説明が必要となる現象は、それまで以下の対応のみであった。サンスクリット語 *pibati* “(s)he drinks”、ラテン語 *bibit* “id.”、古期アイルランド語 *ibid* “id.”。これら形式の祖形として $*pi-ph_3-e-ti$ が建てられるが、語根部初頭の有声の b を説明するには、後続する $*h_3$ によって $*p$ が有声になったと考えざるを得ない（ラテン語 *bibit* の重複音節初頭の b は逆行同化によるものであり、また古期アイルランド語では p は消失した。）。言うまでもなく、音変化を提案する場合にはその裏づけとなる現象が 2 つ以上なければいけない。そうでないと「オッカムの剃刀」の原理に違反することになるからである。

ところが、 $*h_3$ による先行子音の有声化というこの見方は、古期アイルランド語 *aub* の祖形として $*h_2ep-h_3on$ を建てることから付随的に得られる、別個の独立した根拠によって裏づけられるようになったのである。古期アイルランド語だけでなく、ヒッタイト語 *ḥapaš* “river” もこの見方を支持する。*ḥapaš* の p が母音間でシングルで書かれていることに注目されたい。ヒッタイト語などの楔形文字言語では、有声閉鎖音と無声閉鎖音を含む文字を用いて有声と無声を区別することはなかった。書記が区別しようとしたのは閉鎖音の長さ（強さ）の違いであり、短い（弱い）閉鎖音は母音間においてシングルで綴られるのに対して、長い（強い）子音はダブルで綴られる。歴史的には、短い閉鎖音は有声音、長い閉鎖音は無声音に対応する。うへの *ḥapaš* では、p はシングルであるため、この文字は有声閉鎖音に遡ることが分かる。つまり、祖語の時期に $*h_2ep-h_3on$ の $*h_3$ は先行する $*p$ を有声の $*b$ に変え、この $*b$ は古期アイルランド語だけでなく、ヒッタイト語にも継承されているのである。

4.2. 貴重な対応の例

表 11 の 3 行目に *dolluidsi* という形式がある。これは、*do-tét* “(s)he comes, goes” という動詞の直説法過去 3 人称単数形 *do-luid* の関係形である。ここでは鼻音化によって特徴づけられる関係形 (nasalizing relative) が用いられており、前接辞 *do-* の後にみられるダブルの *ll* は鼻音化を受けた結果である。末尾の *-si* は強調代名詞 (emphasizing pronoun) の 3 人称単数女性形であり、主語である彼女 (= 娘) を強調している。

印欧諸語にみられる動詞のアオリストの形式は、語根に直接語尾が付く語根アオリスト (root aorist) **-s-* で特徴づけられる *s-* アオリスト (sigmatic aorist) そして零階梯の語根に **-e/o-* という語幹形成母音が付き、その後に語尾が付与される語幹アオリスト (thematic aorist) の 3 つに大別される。このうち、語幹アオリストについてのカルドーナの詳細な研究によれば⁴²⁾、語幹アオリストはアナトリア語派を除いて多くの語派で用いられているが⁴³⁾、それらのほとんどは分派諸言語で二次的につくられたものであり、祖語に遡るものはほとんどない。唯一の例外は、古くから知られているつぎの対応形式である。ヴェーダ *avidat* “(s)he saw”、ギリシア語 *é(w)ide*、アルメニア語 *egit*。これらは **(e)-wid-e(-t)* という祖形に遡り、3 つの言語で規則的に対応するために祖語からの確実な伝承形と考えられる。

ところが、語幹アオリストを継承する、もうひとつの貴重な形式がある。それはうへの古期アイルランド語 *do-luid* [do-luðʲ] である。*do-luid* は語根の母音度が零であり、また語末の口蓋化した [ðʲ] はその後には前舌母音 **e* があったことを示唆している点で、語幹アオリストの特徴を備えている。前接辞 *do-* を除いた語根部の *luid* に対応する他言語の形式として、ギリシア語 *ēluthe* “(s)he went, came”、トカラ語 A *lăc* “(s)he went”、トカラ語 B *lac* “id.” があり、これらは **(e)-h₁ludh-e(-t)* という祖

42) G. Cardona (1960) *The Indo-European thematic aorists*, Ph. D. dissertation, Yale University.

43) アナトリア諸語に単純な **-e/o-* という語幹形成母音を持つ動詞がまったく欠けていることについては、A. Lehrman (1985) *Simple thematic imperfections in Anatolian and Indo-European*. Ph. D. dissertation, Yale University をみられたい。

形によって規則的に説明できる⁴⁴⁾。

この貴重な対応によって、語幹アオリストは祖語の段階で *wid- という語根にのみみられる孤立したカテゴリーではないことが分かる。

4.3. 子音のダブリング

古期アイルランド語に代表されるケルト諸語の特徴として、その先史で語末が脱落したことがあげられる。語末の脱落自体はよくみられる現象であるが、面白いのは語末が単に脱落するのではなく、隣接する母音や子音に影響を与えることによって、脱落した分節素の特徴の痕跡を残している点である。

たとえば、語の初頭子音の交替という現象がある。古期アイルランド語では、表 12 にみられるように、「彼の」、「彼女の」、「彼らの」を意味する所有代名詞は a という同一の形式であるが、同じ名詞句内部の後続する語の初頭子音に違った影響を及ぼすことによって、機能的な対立を表している。つまり、a「彼の」は弱化、a「彼らの」は鼻音化を引き起こすのに対して⁴⁵⁾、a「彼女の」の場合は変化がみられない。

(表 12)

a chenn [a x'en]	「彼の頭」	a ben [a β'en]	「彼女の」
a cenn [a k'en]	「彼女の頭」	a ben [a b'en]	「彼女の女」
a cenn [a g'en]	「彼らの頭」	a mben [a m'en]	「彼らの女」

(' は先行子音が口蓋化していることを表す)

歴史的な観点に立つならば、この初頭子音の交替は3つの a が本来持っていた語末形式の違いによると考えられる。すなわち、語末形式はそ

44) トカラ語 A lac とトカラ語 B lac について、ワトキンは零階梯の lät- (< *h₁ludh-) “go out”ではなく、e-階梯の lut- (< *h₁leudh-) “drive away”からつくられたという理由で、対応から除外している。C. Watkins (1969) *Indogermanische Grammatik* III/1, Carl Winter の 64 頁を参照。しかしながら、この見方は母音変化の点で問題がある。

45) 弱化は子音が母音的な特徴を持つようになること、つまり有声化や摩擦化のことをいう。また、鼻音化によって無声子音には鼻音の持つ有声性の特徴が与えられる(たとえば、[k] > [g])。

れぞれ母音、s、鼻音で終わっていて、続く語の初頭子音に変化を与えてから脱落したのである。

- *esyō g^wēnā > *esyō β^wēnā > a ben [a β^wen] 「彼の女」
*esyās g^wēnā > *esyās b^wēnā > a ben [a b^wen] 「彼女の女」
*eisōm g^wēnā > *eisōm mb^wēnā > a mben [a m^wen] 「彼らの女」

さて、表 11 の 3 行目に a lláimsi 「彼女の手(を)」という名詞句がある。末尾の-si は先にみた強調代名詞の 3 人称単数女性形であり、所有代名詞の a 「彼女の」を強調している。ここでの問題は、なぜ lláim 「手」の初頭の l がダブルで綴られているかである。うえで述べたように、a 「彼女の」という所有代名詞は後続の初頭子音に影響を与えない。したがって、後続子音が弱化していないことを明瞭に示すために、l がダブルで綴られていると考えられる⁴⁶⁾。

ダブリングによって子音が弱化されていないことを示すやり方は、先にみたように楔形文字で書かれた言語の特徴である。この特徴は母音間でもっともよくみられるが、語末における例もある。それはヒッタイト語 hi-in-kat-ta “(s)he presented” や li-in-kat-ta “(s)he swore” に代表される例である。これらの形式は印欧祖語の能動態 3 人称単数過去に遡り、*-t という語尾をとっていたと考えられる。アイヒナーは、余分と思える-ta という文字が語末にあるために、語源的にはなかった補助母音が付与されていると主張している⁴⁷⁾。しかしながら、まったく別の解釈が可能である。

ヒッタイト語で語末の閉鎖音が弱化したことはよく知られている (*-t > *-d)。この語末閉鎖音の弱化は母音の後でのみ生じたと考えられる。その理由は、子音の弱化は直前の母音によって引き起こされると考えられるからである。たとえば、子音語幹に語尾 *-t が付いたウンブリア語

46) 他にも並行する例がある。たとえば、do-beir と綴られる形式を例にあげると、接頭辞の後の b が弱化している場合は関係形になり、“who bears”あるいは“bears whom”を意味するが、b が弱化していない場合は定動詞になり、“(s)he bears”を意味する。両者を区別するために、テキストによっては後者が do-bbeir と綴られている。

47) H. Eichner (1975) “Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems.” *Flexion und Wortbildung*. Dr. Ludwig Reichert Verlag の 79 頁以下を参照。

fust “(s)he will be”に対して、母音語幹に *-t が付いたオスク語 fusid “(s)he would have been”の場合には弱化がみられる。ヒッタイト語動詞のうち語末に-ta が現れるのは、子音語幹に限られている (hink-, link-を参照)。したがって、ヒッタイト語にみられる語末閉鎖音の弱化も子音の直後では生じなかったに違いない。もしうへの hi-in-kat-ta に ta が付与されていないならば、hi-in-kat といったスプリングになり、直前に母音がかかれていたために末尾の閉鎖音が弱化を受けていると受け取られかねない⁴⁸⁾。したがって、-t という語尾が弱化されていないことをスプリングのうで明瞭に示すために、書記は-ta という文字を付け加えたと考えることができる⁴⁹⁾。

5. トカラ語 A のテキストから

トカラ語は、現在の新疆ウイグル自治区にあるタリム盆地の周辺で紀元前一千年紀後半に使われていた 2 つの言語、トカラ語 A (東トカラ語、アグニとも呼ばれる) とトカラ語 B (西トカラ語、クチャとも呼ばれる) の総称である。表 13 に示したのはトカラ語 A に翻訳された仏教文献からの一節である。

(表 13)

- | |
|---|
| <p>1. mā nu tāṣ knānmāñcāsī śāk-wāknā k_ulewāsac tuñk tsānātsi tārkor. taṃne wewñu: lāñci k_uleyac pācri śnac mṣapaṃtināp śnac śnāṣṣeyāp śnac kāṣṣiyāp śnac lyutār memaṣ potarṣkāṃ k_uleyac kālpa-pālskāṃ k_uleyac mākis kākālyāṃ k_uleyac lyutār-pāk krāmtonām k_uleyac śol kulypamāntāp mā yāl. nunak</p> <p>5. pālsānkāṣ: kus nu cāmpīṣ:, taṃne krāmtonām taṃne-tkanā taṃne-praṣtā kālporāṣ, āñcām sākāssi!⁵⁰⁾</p> |
|---|

48) 楔形文字には、必ず母音がひとつ含まれている。

49) この問題についての詳しい考察は、K. Yoshida (2002) “Observations on some cuneiform spellings: epithetic or graphic?” *Proceedings of the Thirteenth Annual UCLA Indo-European Conference*. Institute for the Study of Man をみられたい。

50) W. Thomas (1964) *Tocharisches Elementarbuch* II, Carl Winter の 21 頁からの引用。

分別のある人間には、十種類の女性に愛を示すことは許されていない。つぎのように言われている 王の女、父の妻、武将の妻、親戚の妻、師の妻、みさかいなくへつらう女、もうけを考える女、多くの人が近づきやすい女、とりわけ美しい女、このような女のところに命を望むものは行ってはならない。……それからまた彼は考える このような美しい女を、このようなところで、このようなときに手に入れたあと、いったい誰が自分を抑えることができようか。

5. 1. 印欧語族のなかでのトカラ語の位置

かつて印欧祖語に再建される *k̥ (前よりの k) が歯擦音 (s や ʃ) になるか、閉鎖音のままであるかという分類基準によって、印欧諸言語を方言区分しようという試みがあった。それによると、ラテン語、ギリシア語、ゲルマン語、ケルト語といった西側の語派では *k̥ は基本的に閉鎖音のままであるのに対して⁵¹⁾、インド語、イラン語、スラブ語、バルト語、アルメニア語、アルバニア語といった東側の語派では歯擦音に変化している。ラテン語とアヴェスタの「百」を表す形式に代表させて (ラテン語 centum、アヴェスタ satəm < 印欧祖語 *k̥mtom)、前者のグループは「ケントウム語群」そして後者のグループは「サタム語群」と呼ばれていた。

さて、印欧語族のうちもっとも東の中央アジアで話されていたトカラ語は、予想に反してケントウムのな特徴を示している。たとえば、表 11 の 1 行目に śāk-wākñā “of ten kinds” という複合語 (通格の形式) があるが、その前部要素 śāk は「十」を意味し、印欧祖語 *dek̥m に遡る (ラテン語 decem、アヴェスタ dasa を参照)。祖語の *k̥ が歯擦音に変化していないため、この点でトカラ語はケントウムのと言える。

同じように、アナトリアのヒッタイト語もケントウムのな特徴を示している。たとえば、kitta(ri) “(s)he lies” は *keitor という祖形に遡るが (サンスクリット語 śete “id.” を参照)、やはり祖語の *k̥ は閉鎖音のまま残っている。

51) ゲルマン語派では、グリムの法則によって *k̥ は *h になる。

後の議論とも関わってくるが、トカラ語とヒッタイト語には他の印欧諸語にはみられないいくつかの古い特徴が保存されている。また、トカラ語は *-r による中動態語尾や *-ā-による接続法を持っている点などで、印欧語の最も西に位置するイタリック語派、ケルト語派と顕著な類似を示している。この点に注目するならば、従来の系統樹モデルとは異なる言語の分岐モデルが考えられる。それは、共通祖語からアナトリア語派がまず離脱し、それに続いてトカラ語、さらにイタリック語派、ケルト語派が離脱したが、中央ヨーロッパに残った諸言語はなお言語共同体としての共通の特徴を持っていたという見方である⁵²⁾。そしてさらに後の時期に、残った諸言語のうち東側グループ(伝統的にサタム語群とよばれているグループ、すなわちインド語、イラン語、スラブ語、バルト語、アルメニア語、アルバニア語)に *k̂から歯擦音への変化が起こった。この見方をとれば、*k̂から歯擦音への変化は早い時期に分岐したアナトリア諸語、トカラ語、イタリック語派、ケルト語派、それに残りの中央ヨーロッパにとどまった諸言語のうち西側グループ(ギリシア語とゲルマン諸語)には及ばなかったことになる。

共通祖語からの分岐以降、トカラ語が多くの独自の音韻変化や形態変化を蒙ったことは言うまでもない⁵³⁾(この点でアナトリア諸語も同様である)。しかしながら、それにもかかわらず、祖語の時期の見逃すことのできない重要な特徴をなお保持している点で魅力ある言語と言える。

5.2. 音変化と類推の関係

表 13 の 2 行目に lāñci “royal” という形容詞(女性単数斜格)がある。この形式は、“king”を表す男性名詞の単数斜格 lānt に-i (< *-yo)という

52) ジャザノフ教授との個人的な談話によると、この見方は故シンドラー教授によってはじめて提案されたという。近年、このような立場をとる研究者は増えてきた。たとえば、C. Melchert (1998) “The dialectal position of Anatolian within Indo-European.” *Proceedings of the Twenty-Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* を参照。

53) トカラ語名詞には 11 の格がある(主格、斜格、属格、呼格、具格、通格、共格、向格、奪格、位格、原因格)。このうち、主格、斜格(=対格)、属格、呼格の 4 つは祖語に遡るが、その他の 7 つは斜格に後置詞的な接尾辞を付与することによって二次的につくられた。これは中央アジアの非印欧語系の言語からの影響と考えられる。

接尾辞を付与することによってつくられる。さて、“king”を表す名詞の単数主格と単数属格はトカラ語 A では wäl, lānt、トカラ語 B では walo, lānte である。一見したところ、単数主格と単数属格のあいだで異なった語幹が用いられているように見える。しかしながら、実際には両者は *wlōnt- という同じ語幹から⁵⁴⁾、規則的な音変化によってつぎのように導き出されたのである。

単数主格 *wlōnt-s > *wļlōnt-s > 共通トカラ語 *wālā

単数属格 *wlōnt-os > 共通トカラ語 *lāntæ

まず、単数主格は単音節語であるため、注(7)で述べた「Lindeman の法則」によって *wlōnt-s が *wļlōnt-s になる。つぎに語末子音の脱落と *l > *äl という変化を経て、共通トカラ語 *wālā が成立した。この *wālā は語頭の *w による円唇化の作用で *wālo になった後、トカラ語 A では語末が落ちて wäl になる一方、トカラ語 B ではアクセントが落ちる *ä は *a になるため walo になった。他方、単数属格については、語幹末子音の t が口蓋化を受けていないために、語尾として *-es ではなく、*-os が再建される。祖形 *wlōnt-os は規則的な音変化によって共通トカラ語 *lāntæ になる。ここから、トカラ語 A では語末が落ちて lānt がつくられ、トカラ語 B では *æ > e という音変化によって lānte がつくられた。

トカラ語 A wäl, lānt、トカラ語 B walo, lānte は、起源的には同一の語幹に単数主格、属格の語尾の付いた規則的な形式であったが、うえでみたように一連の音変化によって両者のあいだの形式面での関連性が希薄になっている。同様の現象が現代英語のいわゆる不規則名詞にもみられる。たとえば、mouse と mice は古英語の mūs と mȳs に遡るが、記録以前の推定形として *mu:s と *mu:s-i が考えられる。つまり、複数形の *mu:s-i は単数形と同じ語幹に語尾 *-i (< *iz < *-es) が付く規則的な形成法を取っていた。ところが、英語の先史に生じた i-ウムラウトという音変化によって、複数形の語幹の母音は単数形と異なるようにな

54) 語根は、ラテン語 valeō “I am powerful”や古アイスランド語 valda “to wield”などに含まれている *wal-である。

ったのである。

音変化によってつくられた不規則な形式が、類推によって規則的な形式に画一化されることはよく知られている。たとえば、現代英語の book は古英語 *bōc* (< **bōk*)から規則的に変化したが、ウムラウトを受けた古英語の複数形 *bēc* (< **bōk-i*)のほうは、音変化によって予想される *beech* ではなく⁵⁵⁾、*books* となっている。これは明らかに現代英語の規則的な複数接尾辞 *-s* が類推によって広がった結果である。これに対して、うえでみた *mice* は類推の作用を受けていない。

以上から、類推と音変化とのあいだには、逆説めいた関係があることが分かる。すなわち、音変化は規則的に適用されるが、不規則性をつくりだすのに対して、類推は不規則に作用するが、規則性をもたらすという関係である⁵⁶⁾。

5. 3. トカラ語とヒッタイト語にみられる保守的特徴

印欧祖語に確実に再建される摩擦音は **s* だけであると一般に考えられている。しかしながら、“earth”を意味するサンスクリット語 *kṣáṃ* とギリシア語 *khthón* を比べると、サンスクリット語の摩擦音 *ṣ* がギリシア語の閉鎖音 *th* に対応していることが分かる。このことから、ポコルニーの印欧語語源辞典では **ǵh₂om-*という語根が両者に対して与えられている⁵⁷⁾。つまり、祖語の子音体系に **s* 以外の摩擦音として **ǵ* を建てているのである。また、「熊」を意味するサンスクリット語 *ṛkṣaḥ* やギリシア語 *árktos* などに対しても、祖形として **ṛk₂pōs* が建てられている⁵⁸⁾。この場合も、**p* の再建はサンスクリット語の *ṣ* とギリシア語の *t* の対応を説明するためである。注目しなければいけないのは、いずれの場合も **ǵ* と **p* の前に軟口蓋閉鎖音があることである。

**ǵ* や **p* を再建する必要があるかどうかという問題について、トカラ語は重要な鍵を担う形式を持っている。それは表 13 の 5 行目に現れて

55) book の複数形として予想される ***beech* は、「ブナ」の *beech* (< 古英語 *bēce*) と同形であるが、book と *beech* は **bhāgo-*「ブナの木」という同じ語根から派生されている。古代ゲルマン人はブナの木皮に文字を刻んでいた。

56) この関係は「スタートヴァントのパラドックス」としてよく知られている。

57) J. Pokorny (1959) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch* I. Francke Verlag の 414 頁。

58) 同じく Pokorny (1959) の 875 頁。

いる tamne-tkanā “in such a place”の後部要素の tkanā (通格の形式) である。この形式の単数主格はトカラ語 A では tkam、トカラ語 B では kem で、両者は共通トカラ語 *tkæm に遡る。これはうえのサンスクリット語 kṣām やギリシア語 khthón と明らかに対応すると考えられるが、ポコルニーの *ḡhōm-という再建形とは違って、子音連続内部で軟口蓋閉鎖音の位置が逆である(軟口蓋閉鎖音を K、歯茎閉鎖音を T で代表させるなら、ポコルニーの再建形は Kð という子音連続を持つものに対して、トカラ語では TK である)。

このトカラ語の事実にまさに合致する重要な対応形式がヒッタイト語に見出される。それは、単数主格 te-e-kán “earth”と単数属格 ták-na-a-aš である。母音のダブリング (scriptio plena) がアクセントの位置を示すことを考慮するなら、この形式は単数主格がアクセントの落ちる e-階梯の語根と o-階梯の接尾辞によって、単数属格が零階梯の語根と接尾辞およびアクセントの落ちる e-階梯の語尾によって特徴づけられる母音交替をしていたことが分かる(単数主格 *dhégh-h-ōm、単数属格 *dhgh-m-és)⁵⁹⁾。

多くの重要な点で祖語の特徴をよく保持しているトカラ語とヒッタイト語において、子音が TK という連続を示していることは偶然とは考えられない。ヒッタイト語とトカラ語の TK が本来の子音連続であり、サンスクリット語やギリシア語などで TK が Kð に変化したに違いない。シンドラーは、ð が二次的に生まれたことを以下のように説明している⁶⁰⁾。属格などにみられる TK の子音連続が音位転換を起こし、つぎに T が摩擦化した (TK > KT > Kð)。こうしてつくられた Kð という連続が後にパラダイム内部に一般化された。そしてこの説明の例外に対しては、主格にみられる TeK-が類推によって広がったか、あるいはこの音変化以後に成立した形式であると考えた。

このシンドラーの簡潔な説明は説得力に富んでいる。ただ音位転換のつぎに摩擦化という順序を動機づける根拠は見当たらないように思われ

59) いわゆる amphikinetic のタイプの母音交替である。最近の研究によれば、ヒッタイト語 šuatt- “day”やサンスクリット語 dyút- “shine”も本来 amphikinetic タイプの母音交替を示していた(単数主格 *diéu-ot-m、単数属格 *diu-t-és)。詳しくは、K. Yoshida (2000) “The original Ablaut of Hittite šuatt-.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 60 をみられたい。

60) J. Schindler (1977) “A thorny problem.” *Die Sprache* 23.

る。典型的に考えるならば、TT という子音連続はバルト語派やスラブ語派では st、ヒッタイト語で zt になるのであるから、これと並行的にまず摩擦化が起り、つぎに音位転換が生じたと考えるほうが妥当とされる (TK > δK > Kδ)。

いずれにせよ、トカラ語とヒッタイト語の根拠から、*s 以外の摩擦音を祖語に建てる必要はないであろう。印欧祖語からもっとも早い時期に分岐したヒッタイト語とトカラ語に、他の諸言語が失った祖語の特徴が保存されていることは何ら不思議ではない⁶¹⁾。

6. リュキア語のテキストから

比較言語学の研究において、もっとも古い時代に記録された文献資料を持つ言語が大きな役割を果たすことは言うまでもない。このような言語には、祖語に遡ると考えられる言語特徴が保存されていることが多いからである。この意味で、20 世紀初頭の小アジアでのヒッタイト語の発見は、印欧語比較言語学の進展にとって画期的な出来事であった⁶²⁾。しかしながら、古代アナトリアで使われていた印欧語はヒッタイト語だけではない。ほかに、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、パラ語、リュディア語などがあり、多くの新資料の発掘ともななって個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が近年飛躍的に進んだ。その結果、ヒッタイト語だけでなく、他のアナトリア諸語も祖語の再建という目標に向けて有機的に寄与することが可能になった。表 14 に示したのはリュキア語のテキストであるが⁶³⁾、その 5 行目に “sheep” を表す χawā- という形式がある。この形式は、祖語の再建という目標の達成に向けてきわめて重要な役割を果たす。

61) *b の再建の問題についても、ヒッタイト語は ḫar-tág-ga-aš [hartkas] 「熊」という TK という連続を示す貴重な形式を持っている。したがって、ポコルニ一の *r̥k̥pos ではなく、*rt̥kos が再建されるべきであろう。

62) 印欧語比較言語学におけるヒッタイト語の重要性については、たとえば拙文「最も歴史をよく語る言語」『言語』27 巻 5 号 (1998) をみられたい。

63) E. Kalinka (1901) *Tituli Asiae Minoris: Tituli Lyciae lingua Lycia conscripti*. Hoelder-Pichler-Tempsky の 92 頁より。ただし、転写については現在の標準的な方法に従っている。欠落している個所や解釈できない個所があるため、訳は暫定的であることをお断りしておく。

(表 14)

1. ebēñnē prīnawā me ne prīnawatē ijamara terssiχleh◇ tideimi malijahi wedrēñnehi aχ#ātaza me pibijeti prīnezi se tteri adaijē mei ne ñtawātā pibijeti tere ebehē me ije ne hrppi tāti tike ijamaraje tibe ladi ehbi hrpplije mei] tadi tike kbi tike χttbadi ēti
5. prīn[ezi tibe] kbijehi tike me httēmi ānabajē se [...] wedrēñni āñmāma kñma sñta wawā se k[...] χawā sē ne tesēti qāñti trñmilijēt#i [...]

この墓は、テルシクレの息子で、マリヤの町の司祭(?)であるイママラが建てた。そして彼はその墓を家のものに与える。……(?)。そして彼らは、イママラあるいは彼の妻のために、そこに誰も安置しない。もしそこに誰かがほかの誰かを安置したり、悪意を持ってほかの家のもののために誰かを安置するなら、その者は責任を負う。そして、町の(……)に罰金として10頭(?)の牛と(……)羊を(……)、そしてリュキアの呪いがその者を滅ぼす。

6. 1. 語頭の喉音

喉音理論の発展とともに、印欧祖語には3種類の喉音(*h₁、*h₂、*h₃)が存在していたと一般に考えられるようになってきている⁶⁴⁾。このうち、*h₁はアナトリア祖語ですべての位置において消失したのに対して、*h₃は語頭においてのみ存続した。一方、*h₂は語頭だけでなく語の多くの位置で保持された。この見方にしたがうならば、ヒッタイト語で語頭にh₂a-がみられる場合、h₂が伝承しているのが*h₂なのか*h₃なのかをヒッタイト語内部で決定することは不可能である。なぜなら、*h₂と*h₃は隣接する母音*eをそれぞれ*aと*oに変えるが、ヒッタイト語では後に*aと*oは*aに融合してしまうからである。つまり、h₂a-の祖形として、*h₂e-(>*h₂a-)、*h₃e-(>*h₃o->*h₃a-)、*h₂o-(>*h₂a-)、*h₃o-(>*h₃a-)という4つの可能性が少なくとも考えられる。アナトリア諸語以外の言語に対応形式があり、それがa-ではじまる場合は、祖

64) これは、M. Mayrhofer (1986) *Indogermanische Grammatik* I/2. *Lautlehre*. Carl Winterなどにみられる標準的な見方であり、筆者もこの見方を受け入れている。

形が *h₂e-を持つことが分かるが(ヒッタイト語 *ḫant-* “front”、ギリシア語 *anti-* < *h₂ent-) o-ではじまる場合は、祖形を *h₃e-、*h₂o-、*h₃o-のうちどれかに決定することはできない。

語頭の喉音の種類を決める際に生じるこの問題は、“sheep”を意味する語にも当てはまる。この語は、ヒッタイト語ではつねに UDU という表意文字で書かれているためにその発音を知ることができないが⁶⁵⁾、楔形文字ルウィ語には *ḫāqīš*、象形文字ルウィ語には *hawa/i-* という形式がある。また、先に述べたように、リュキア語 *χawa-* も同源形式である。以上の対応に基づけば、語頭に *h₂ あるいは *h₃ があつたことが分かる。さらに、ギリシア語(ホメロス) *oīs* やラテン語 *ovis* という対応形式が母音 o を持っているために、祖形として *h₂o_{ui-}、*h₃e_{ui-}、*h₃o_{ui-} が考えられるが、このうちどれが正しいかは決定できない⁶⁶⁾。この問題に関して、重要な役割を果たすのはリュキア語とヒッタイト語のあいだにみられる喉音の対応関係である。

うえでふれたヒッタイト語 *ḫant-* “front” (< *h₂ent-) に対応するリュキア語の形式は *χāntawa-* “rule” であり、*h₂₋ はリュキア語で *χ-* で現れることが分かる。これに対して、ヒッタイト語 *ḫappar-* “business, trade” に対応するリュキア語は *epirije* “sell” であり、リュキア語では語頭の喉音が消失している。これに代表される事実に基づいて、キンボルはつぎの対応関係を提案した。

ヒッタイト語 *ḫ-* = リュキア語 *χ-* = 印欧祖語 *h₂₋
 ヒッタイト語 *ḫ-* = リュキア語 *ø-* = 印欧祖語 *h₃₋

この見方にしたがえば、うえのリュキア語 *χawa-* “sheep” は語頭に *χ-* を持っているので、*h₂₋ に遡ると考えられる。したがって、うえであげた3つの可能性のうち(*h₂o_{ui-}、*h₃e_{ui-}、*h₃o_{ui-}) *h₂o_{ui-} が祖形として妥当であることが分かる。

65) 表意文字は意味情報だけを伝える文字である。転写の際は、便宜上シュメール語の読みで代表させる。

66) どの祖形を再建するかは、研究者によって意見が違っている。詳しくは、S. Kimball (1987) “*H₃ in Anatolian.” *Festschrift for Henry Hoenigswald on the occasion of his seventieth birthday*, eds. by George Cardona et al. Gunter Narr の 189 頁の注 5 を参照。

しかしながら、この *h₂oṷi- という祖形からリュキア語 χ₂awa- を直接導くには、母音変化の点で問題がある。従来、印欧祖語の5母音体系は、アナトリア祖語では *o が *a に融合した結果、*a、*e、*i、*u の4母音体系になったと考えられていた。しかしながら、メルチャートはウムラウトの影響を受けなかったことが確実なリュキア語の形式に注目することによって、アナトリア諸語の母音につきのような対応を設定した⁶⁷⁾。

リュキア語 a = ヒッタイト語 a = 楔形文字ルウィ語 a = 印欧祖語 *a
リュキア語 e = ヒッタイト語 a = 楔形文字ルウィ語 a = 印欧祖語 *o

この対応は、たとえば、つぎのような例にみられる。1人称単数中動態過去語尾リュキア語 -χa/-χā/-gā = 楔形文字ルウィ語 -ḫḫa = 印欧祖語 *-h₂e (> *-h₂a)。リュキア語 nte “into” = ヒッタイト語 anda = ラテン語 endo = 印欧祖語 *endo。この画期的な発見によって、アナトリア祖語は印欧祖語の5母音体系を継承していることが明らかになった。さて、この対応にしたがうならば、印欧祖語 *h₂oṷi- からリュキア語に予想される形式の最初の母音は e であるはずなのに、実際のリュキア語 χ₂awa- では a が現れている。この事実はどのようにして説明することができるのであろうか⁶⁸⁾。

これまでの研究でまったく抜け落ちていたのは、リュキア語 χ₂awa-、楔形文字ルウィ語 ḫāṷiš、象形文字ルウィ語 hawa/i- などが *h₂oṷi- という印欧語の再建形から歴史的に派生されたとしても、この再建形が祖語においてどのような母音交替を示していたのかという視点である。この視点からリュキア語 χ₂awa- の起源的な母音交替のタイプを考えることによって、問題は解明できるのである。

これまでに祖語に存在したことが立証されている母音交替のタイプの

67) H. C. Melchert (1992) “Relative chronology and Anatolian: the vowel system.” *Rekonstruktion und Relative Chronologie*, eds. by Robert Beekes et al. Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.

68) 言うまでもないが、もし *h₂eṷi- を祖形として建てるなら、ギリシア語 oīs やラテン語 ovis の母音 o が説明できない。この問題を説明しようとするひとつの試みが H. C. Melchert (1994) *Anatolian Historical Phonology*. Rodopi の296頁以下にみられるが、メルチャート自身認めているように、以下に示す筆者の見解のほうが妥当と思われる。

うち、強語幹（単数主格など）、弱語幹（単数属格など）にかかわらず語根に *o*-階梯を持つものは語根名詞といわれる *acrostatic* タイプにみられる。この2つのうち、印欧語の語根は一般に CV(R)C- という構造を示すために、**h₂ou̯i-* が語根名詞であるとは考えられない。そうすると、*acrostatic* タイプの可能性しか残されていない。このタイプでは、アクセントが接尾辞にも語尾にも移動せず、語根に固定している。そこで、**h₂ou̯i-* がこのタイプであったと考えるなら、つぎのような母音交替を示していたことになる。

単数主格 **h₂óu̯-i-s*

単数属格 **h₂éu̯-i-s*

この再建によって、分派諸言語の同源形式に対して自然で分かりやすい歴史的説明が与えられるようになる。すなわち、アナトリア諸語以外の言語では（ギリシア語 *oīs* やラテン語 *ovis* など）強語幹の **h₂óu̯-i-* がパラダイム全体に一般化されたのに対して、アナトリア諸語では弱語幹の **h₂éu̯-i-* が一般化されたと考えればよい⁶⁹⁾。類似したプロセスは多くの現象に観察される。たとえば、“foot”を意味する名詞は、**pód-*（強語幹）、**péd-*（弱語幹）と再建できるが、ギリシア語では *pós*（主格）、*podós*（属格）のように強語幹が一般化されているのに対して、ラテン語では *pēs*（主格）、*pedis*（属格）のように弱語幹が一般化されている。この見方では、リュキア語 *χawa-* の最初の *a* は二次的な変化を考えなくとも、**h₂e > *h₂a > χa* という音法則だけで自然に説明される。

6. 2. 祖語の性格

比較言語学のもっとも重要な課題が音対応に基づいて祖語を再建し、この祖語の段階から分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることにあるのは言うまでもない。印欧祖語の再建という試みを初めて行なったのはシュライヒャーであるが、彼が提示した再建のなかには、うえで考察した“sheep”を意味する名詞が含まれている⁷⁰⁾。

69) あるいは、本来の母音交替がアナトリア語派の段階でなお保持されているとするなら、弱語幹の一般化はリュキア語内部の先史に起こったと考えることもできる。

シュライヒャーは、当時知られていたサンスクリット語 *avis*、ギリシア語 *oīs*、ラテン語 *ovis* などの対応に基づいて、**avis* という印欧語祖形を建てた。この祖形はサンスクリット語の形式と同一であるが、これはサンスクリット語が印欧祖語にきわめて近いという、当時の主流であった見方を反映している。

しかしながら、サンスクリット語の口蓋化の法則が発見されて以降は、サンスクリット中心主義からの離脱が進み、母音についてはギリシア語、ラテン語のほうが古い状態を保持していることが明らかになった⁷¹⁾。これによって、たとえばヒルトはシュライヒャーの再建形 **avis* を **owis* と修正している⁷²⁾。この新しい再建形はデータのよりすぐれた解釈がもたらした成果である。

さらに、アナトリア諸語の発見によって、この名詞は語頭に喉音を持っていたことが資料的に裏づけられた結果、**h₂óu-i-*という祖形が導き出されるようになった。この場合の祖形の修正は、それまで知られていなかった新出資料の発掘に基本的に負っている。

本稿では、この名詞が祖語の時期において強語幹 **h₂óu-i-*と弱語幹 **h₂éu-i-*によって特徴づけられていたことを示した。これは母音交替という視点からの祖形の修正と言える。この名詞にみられる再建形の歴史は、祖語というものは分派諸言語の事実に基づく理論的要請であり、新しいデータの発見やより優れた方法論の導入によってつねに改変され得るという祖語の性格をよく例証している。

7. おわりに

歴史学や考古学は史料や発掘物に基づいて、それぞれ過去の歴史や生活を復元する。同じように、比較言語学はテキストを広い視点から綿密

70) A. Schleicher (1868) "Eine Fabel in indogermanischer Ursprache." *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung* 5.

71) 口蓋化の法則の発見によって、サンスクリット語の *ca* /tʃa/ "and" と *kad* /kad/ "what" はつぎのように説明されるようになった。**k^we* > **ke* > **ce* > *ca*、**k^wod* > **kod* > *kad*。つまり、この場合、サンスクリット語の *a* は **e* や **o* に遡ることになる。

72) H. Hirt (1939) *Die Hauptprobleme der indogermanischen Sprachwissenschaft*. Max Niemeyer.

に読むことによって、言語の先史を復元することを可能にしてくれる。テキストには分析の鍵となる重要な事実が含まれているからである。本稿ではいくつかのインド・ヨーロッパ古文献を対象にして比較言語学的分析を行なったが、今後は新出資料も含めて分析の対象を広げていきたい。

（京都大学大学院文学研究科教授）